

千葉市制 100 周年記念 第 3 回千葉氏サミット

パネルディスカッション

～千葉氏が生きた中世のまちと人々の暮らし～

開催日：令和 3 年 8 月 21 日（土）

会 場：三井ガーデンホテル千葉

○司会 それでは、お時間となりましたので、これより、有識者によるパネルディスカッションを開催いたします。テーマは、「千葉氏が生きた中世のまちと人々の暮らし」でございます。

パネルディスカッションに御参加いただく皆様を御紹介いたします。

まず、佐賀県小城市教育委員会文化課学芸員であります古庄秀樹様、よろしくお願いいたします。

一般社団法人鎌倉・中世文化研究センター理事を務められております馬淵和雄様。

千葉市立郷土博物館で、総括主任研究員を務めております外山信司様。

コーディネーターには、千葉市立郷土博物館研究員及び東金市文化財審議会会長を務めております遠山成一様に御登壇いただいております。

皆様、よろしくお願いいたします。

それでは、これよりパネルディスカッションの進行につきましては、遠山様にお願いしたいと存じます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

○遠山 それでは、早速ですけれども、今、司会のほうでおっしゃっていただいたように、テーマとして「千葉氏が生きた中世のまちと人々の暮らし」ということで、これからパネルディスカッションを始めていききたいと思います。

それに先立ちまして、各報告者の方々から、大変時間が短くて恐縮なんですけど、10 分ずつ、それぞれのまちの特徴とか、こういったことがわかっていますよということをお話いただければと思います。

それでは、まず最初は、千葉のまちということで、外山さんからお願いして、その後に、小城の古庄さん、鎌倉の馬淵さんの順で、お願いしたいと思います。

それでは、外山さん、お願いいたします。

○外山 それでは、よろしくお願いいたします。外山です。

まず最初に、千葉氏についてですけれども、この千葉氏という武士団の実質的な祖というのは誰なのか。もちろん、血のつながりからいえば、桓武天皇まで遡るわけですが、先ほど、保立先生のお話にありましたように、実際はこの千葉の地、下総の国千葉庄（ちばのしょう）というところに本拠地を定めたというところから、実際は千葉氏が始まるわけですし、そう考えると、千葉常重という人がやはりキーマンじゃないかと思います。ですから、実質的な千葉氏の祖は常重と言えるのではないかと。血のつながりとか、そういうことは別と

して、千葉にやってきて、それで常重によって千葉氏という武士団が成立した。ですから、千葉氏にとって、千葉というところが「名字の地」、名字として名乗るところ、「一所懸命の地」になったというところで、きょう、保立先生のお話なども伺っていて、やはり、この常重という人をもっと評価しなければいけないのではないかと思います。開府900年を控え、漫画にもなっておりますし、どうしても常胤が脚光を浴びるわけですが、常胤はもちろん重要な人物ですが、そのお父さんの常重をもっと評価していいんじゃないかというふうに、きょう、つくづく思いました。

ただ、常重の生涯は苦難の連続でありまして、その常重が直面したいろいろな大きな課題、それを解決したのが常胤です。そういう意味でいうと、常重、常胤の二代にわたって、千葉氏という武士団が大きく成長したのではないかというふうに、つくづく思っている次第です。

それから、保立先生のお話を伺って、いわゆる大治元年に千葉を立てたという、この歴史的な史料的な根拠というのは、『千学集抜粹』しかないのですが、1126年ジャストかどうかは別として、このころに、千葉が立てられたということは認めていただいて、したがって、厳密に1126年かどうかは別として、「千葉開府900年」という年代観は正しいんじゃないかなということで、今日、意を強くした次第です。

保立先生から詳しいいろいろなお話があったので、私のほうは簡単にしたいと思うんですが、まず最初に、スライド1枚お願いします。

「千葉の町の構造」というところです。国立歴史民俗博物館の小島道裕さんが中世の城下町の特徴として、大名と主従性結合を持つ人間によってつくられた空間、これはAというふうに私が番号をつけておきましたが、要するに大名と家来、大名に仕える御用商人とか、そういった人たちも含めてですけども、広い意味での大名とつながりを持った給人、所領や給料などをもらっている人ですね、所領などをもらっている、そういう人たちが住んでいる地域。それから、大名と直接主従関係を持たない人たち、江戸時代的に言えば、町人とか職人とか、そういった人たちが住む市町、保立先生のお話でも何回も出てきました。これがB空間。

このAとBの2つの質の異なる空間によって構成されるのではないかというふうに、小島先生が、中世のいわば武士の足下、城下町についておっしゃっているんですが、これは千葉についても十分当てはまるんじゃないかと思います。

では、もう1枚お願いします。

このA、千葉でいうと、これは堀内（ほりのうち）というふうに呼ばれておりまして、簡単に言うと都川の北側です。今の千葉神社のある院内町とか本町とか中央町とか、そういった辺りが中心でありまして、ここでは、『千学集抜粹』にも、「屋形様堀内」とか千葉神社は「堀内北斗山金剛授寺」というように出てきますので、あの辺であったことは間違いありません。

そして、平家方の藤原親政が千葉に攻めてきたときに、それを迎え撃った成胤、常胤の孫

ですけれども、重胤かもしれませんが、「重代相伝の堀内」というふうに言っているんですね。先祖から代々伝えられた堀内であるということでありまして、簡単に言うと、都川の北岸が堀内。ここに千葉氏の館があり、千葉氏と関係のある人たちが住んでいた。

堀内は、館そのものと、あるいはもっと広い、千葉氏と結びついた人たちの住む空間という意味と、二つの意味がありましたが、いずれにせよ、都川の北側です。

次をお願いします。

そこには、千葉神社、北斗山金剛授寺や千葉氏のお墓のある大日寺などの寺社などがあったわけです。あと、もちろん家臣の屋敷。といっても、江戸時代の城下町のようにびっしり住んでいたわけではなくて、千葉氏に直接仕える、千葉氏の官僚のような人たちだけが住んでいたんじゃないかというように考えられます。

では、次をお願いします。

次のB空間、これが千葉氏と直接身分的につながりを持たない、いわゆる商人とか職人とか言われる人たちが住んでいた地域です。ここが市場なんですね。『千学集抜粹』には「橋より向、御達保までは宿人屋敷也。これによって河向を市場と申なり」とあります。先ほどの保立先生のスライドの中では、「町方市場」というふうに出てきました。こちらが、都川の南側がそういう市場とか町、そして、寒川湊があった空間です。

では、次をお願いします。

こちら、今、県庁の真ん前になっているわけですが、羽衣の松というのがあります。そこには、天女が舞い降りたという伝説があります。天女が本当に舞い降りたかどうかというのは、それは伝説の話ですけれども、何で天女は市場に来るんだと、都川の南岸に現れるんだと思いました。天女は川の北側に現れないんですよね。千葉神社のほうとかには来ないんです。市場に現れる。

それはやっぱり、ここに市があって、市場は、網野善彦さんが言っているように、オープンな場所で、外と内との出入りの場所である。そういう聖なる空間、あるいは、この世とあの世、この世と異界との境であった。だから、そこに天女が現れる。

ですから、この天女の伝説というのは、私も今まではあんまり真剣に考えたことはなかったのですが、市場に天女が現れるということは、ものすごく重要なのではないかなというように思います。ちなみに、羽衣の松は、市場町1の1にあるんですよね。

次をお願いします。

そのA空間とB空間、寒川の湊を含めて、B空間とA空間をつなぐ背骨のような役割を果たすのが、本町通り、あるいは市場町通りと言われる、今も国道になっていますが、メインストリートです。

そして、A空間とB空間、堀内と市場をつなぐのが大和橋。それは江戸時代にはただ「大橋」と言われていました。したがって、千葉神社のお祭りでも、今もちょうど、きょうもお祭りがありまして、市場町に御飯屋というところがあって、御神輿が千葉神社から出て、わざわざ大和橋を渡って、そして、川向かいの御飯屋、市場町に行って、そこに1週間いるわ

けです、御神輿がですね。戦前は、それをさらに寒川の人たちが受け取って、御浜入りしていたわけですね。そういうことになります。

では、次をお願いします。

これは、今回のチラシにもなっておりますが、相馬の歓喜寺様の妙見の中世の姿を伝えるお祭りの様子です。

結城舟と千葉舟という舟形の山車があって、真ん中に流れているのが都川です。橋がかかっています。これで言うと、皆様から見まして右側の家とかがいっぱいあるところがA空間、あんまりない左側がB空間、市場ということになります。

では、次をお願いします。

これは、今の市場町の御仮屋です。市場町に来るわけです。下が御浜下りの様子です。

次をお願いします。

これも、保立先生の図にもありましたけど、簡単に言うと、左側の図で言えば、真ん中が都川で橋が結んでいて、上、北側が堀内、南側が市場町ということになります。

では、次をお願いします。

千葉については、発掘事例とかもほとんどないので、まちについては言えるのですが、今日のテーマである人々の暮らしについては、ほとんど言えません。ただ、この亥鼻で、こういった12世紀から13世紀の日本だけではなくて、瀬戸や常滑焼だけではなくて、中国の陶磁器も出ているわけですね。新田遺跡からも出ています。そういうふうに考えると、千葉は日本全国、あるいは中国ともつながっていたということが言えると思います。

次をお願いします。

「ちばの売り酒」のお話は、保立先生からありましたので省略します。今も行われている、きょうも行われている千葉神社のお祭りというのは、古庄先生からあるかもしれませんが、祇園系の夏祭りなんですね。農村の祭礼ではないんです。都市の祭礼なんですね。

さらに、千葉には「道場」というところがありまして、中央区に道場北町と南町があります。なぜ道場と言うかという、「千葉道場来迎寺（来光寺）」という、今は轟町に移っていますが、時宗の寺院、時宗の寺院は道場と言いますが、それがあった。

そして、そこには『曾我物語』によると曾我兄弟の十郎の恋人の大磯の虎という女性が、兄弟の骨を首にかけて諸国の霊場を巡るんですけども、そのときに、千葉妙見宮に参詣していると係れています。ですから、そういった時宗の人々たちがやってくる、そういう都市的な場であったということが言えるのではないかと思います。

次をお願いします。

最後になりますけれども、1455年、享徳の乱で千葉城が落城して、千葉氏が本佐倉のほうに移ってしまいますが、そこで、千葉が衰退したのか。何か今まで、千葉氏がいなくなっている、千葉はまた漁村に戻ったんじゃないかというふうに思われてきたのですが、そうではない。依然として、ずっと「まち」なんですね。

戦国期の永正6年に、連歌師の宗長がやってくるのですけれども、そのときには、妙見社

のお祭りで、300 疋の早馬が町中を疾走し、そして猿樂も行われているし、非常に繁栄しているんです。

そんなことを考えると、やはり、千葉のまちというのは、千葉氏がいなくなっても繁栄を続けた。それを支えていたのは、千葉のまちの人たちなんじゃないかと思います。そう考えると、妙見も千葉氏の軍神、氏神だけではなくて、もっと千葉のまちの人たちに支えられていたと、そういう面もあった。

だからこそ、千葉氏が佐倉に行っても、千葉神社がここに残った。それを支えていたのはまちの人々、まちの賑わいということなのではないかと思います。

以上です。

○遠山 どうもありがとうございました。お時間のないところで、よくまとめていただいたと思いますけれども、まだ足りないところは、この後の討論の中でよろしく願いいたします。

それでは、続きまして、小城の古庄さん、お願いいたします。

○古庄 こんにちは。古庄と言います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

九州のほうは、九州佐賀、先日来の大雨で大変な状況になっています。1,000 ミリを超える雨が降って、小城のほうも 60 軒を超える床下、床上浸水のところがありまして、ほんとにきょう来られるのかなと思っていた状況です。佐賀空港は使えなくて、福岡のほうからやってまいりまして、何とか無事にここに来てお話ができることは幸いだと思っています。きのう、早速、着いて千葉神社のほうにお参りしてきました。きょうも発表ができるようにということで、お祈りしてきた次第です。

それでは、小城のほうのお話をさせていただきたいと思います。

小城は、千葉氏の嫡流が鎌倉時代の終わりごろにやってまいりまして、その後、その子孫が土着して、戦国大名級にまで勢力を拡大し、その本拠として栄えるわけです。そのことを御報告させていただきたいと思っています。

次をお願いいたします。

千葉氏と小城のかかわりでございますけれども、これは、皆さん御存じのように、常胤が頼朝の鎌倉幕府をつくるときに支援を行いまして、その恩賞の 1 つとして小城郡の惣地頭職を得たと。それから、小城のかかわりが始まるわけです。

でも、実際は、千葉氏の嫡流が、殿様が来るわけではなくて、代官を派遣したということになります。惣地頭という位置づけになりますが、その当時には、小城の小地頭として、東郷の次郎、あかしの執印、大宮司入道と、そういう方たちが小城にはいて、惣地頭として小城を、千葉氏をいってがいたということになります。

次をお願いいたします。

実際に千葉氏の嫡流と小城のかかわりが出るのは、蒙古襲来のころからでございます。頼胤が、蒙古襲来のときに小城に下向してきて、文永の役易で傷を負って小城で死去することになります。その後、頼胤の死去後に宗胤が下向し、小城にあります円通寺の再興を

行い、宗胤が九州千葉氏の祖と言われております。

次をお願いいたします。

宗胤は、小城にすばらしい仏教文化、仏様をつくっております。これは、円通寺の持国天、有名な湛康という仏師がつくったものでございます。

次をお願いいたします。

これは、三岳寺の三尊になります。大日如来、薬師如来、十一面観音、これも湛康という仏師がつくったすばらしい仏様、鎌倉時代の仏像になります。県の重要文化財になっております。宗胤の死去に合わせて、これを制作しました。

次をお願いいたします。

その後、宗胤が亡くなりますと、胤貞が下向をしてまいります。これは市内にあります日蓮宗の寺院、光勝寺に伝わっている胤貞公の座像でございます。

次をお願いいたします。

胤貞と小城のかかわりでございますけれども、胤貞は、小城にいろいろな足跡を残しております。千葉城の築城、祇園社の造営、松尾山光勝寺、これは日蓮宗寺院ですけれども、その建立、それと妙見信仰、そういうものを小城にもたらししております。

次をお願いいたします。

胤貞と日蓮宗でございますけれども、右側の光勝寺は、鎮西の総本山として胤貞がつくられたものでございます。この開山は、千葉の中山法華経寺の日祐となっております。左側ですけれども、小城市内にある勝妙寺、ここには、日蓮の直筆の曼荼羅、そういうものも伝わっております。小城と日蓮宗のかかわり、これは千葉氏を抜きにしては語れないところでございます。

次をお願いいたします。

これは胤貞がつくったとされる千葉城でございますけれども、一番古い文書では、1351年、南北朝期、観応の擾乱のころですけれども、千葉城の記述がこのように見えてまいります。廃城は天文14年（1545）と考えられております。大体200年ぐらい存続した山城でございます。

次をお願いいたします。

これは、小城市の北側にある千葉城の全景でございます。

次をお願いいたします。

これは、千葉城の縄張り図でございますけれども、東西900メートル、幅300メートルの巨大な山城で、北部九州でも最大級の規模の山城ではないかというふうに考えております。ただ、縄張りとしては、古いタイプの縄張りで、戦国期の縄張りを残していないようです。

次をお願いいたします。

千葉城の発掘調査では、こういう石垣とか塹堀が発掘をされております。以上です。

次をお願いいたします。

千葉城の本丸、主郭部分の発掘調査を行いました。そこからは、中国産の陶磁器や何とベトナムでつくられた陶磁器、そういうものも出土しております。そういう山城の主郭部で、こういうすごい陶磁器類が出土するのは稀でして、陶磁器を飾る会所、何か建物みたいなものがあったのではないかと考えております。

当時、山城には、そういう主郭部分には、本格的な建物は無いのではないかと考えられておりましたが、こういう発掘調査の結果によって、改めて見直すいい機会になったのではないかとこのように考えております。以上です。

次をお願いいたします。

千葉城の北側に妙見遺跡というのがございまして、それは千葉氏の館跡と考えられているところでございまして。そこからは、火鉢、土鍋、そういうものが大量に出土しております。

次をお願いいたします。

その妙見遺跡の一角には、妙見神社がございまして、妙見菩薩が祭られております。

次をお願いいたします。

あと、ぜひ御紹介したいのは、朝鮮の国でつくられた『海東諸国紀』という本でございまして、この中に千葉氏のことが触れられております。15世紀につくられた本ですけれども、その中に「千葉殿」とありまして、小城には、民居が1,200、正兵が500いたということが書かれています。

次をお願いいたします。

その『海東諸国紀』の記述での勢力の比較です。この赤い部分が小城のことですけれども、小城には1,200民居があつて、正兵が500余りいたと。北部九州のほかの勢力を比較してみても、大規模な都市であつたことがわかると言えます。この『海東諸国紀』にみえる千葉氏が派遣した使者については、いろいろな研究の成果で、偽使という、そういう報告もございしますが、ある一定の程度の中世の様相を示しているのではないかと考えているところでございます。

次をお願いいたします。

千葉城の南側に祇園川という川が流れておりまして、その河原を発掘したんですけれども、そこからは、こういうような陶磁器や鍛冶にかかわる道具が出土しておりまして、千葉城の南側の祇園川沿いには、まちがあつたというふうに考えております。以上でございします。

次をお願いいたします。

その当時の中世の町並み、まちの様子、中世の小城のまちの景観ですけれども、千葉城を中心に、その北側に武家の集落があり、その南側、祇園川沿いに城下集落があつて、その西側に宗教施設、光勝寺とか円通寺、そういうものがあつたというふうに考えておりまして、中世の小城の様相は、こういう景観を示していたのではないかとこのように考えております。

次をお願いいたします。

その光勝寺、日蓮宗寺院でございますけれども、その発掘調査が行われまして、光勝寺の本堂の裏山から大規模な石塔群が発掘をされております。

次をお願いいたします。

いろいろな多種多様なこういう石塔類が発掘されておまして、これは日親上人、15世紀、「鍋かぶり日親」という日蓮宗の有名な僧侶がおりますけれども、日親とのかかわりを示す貴重な資料ではないかというふうに考えているところです。

次をお願いいたします。

あとは、千葉氏は、大内、大友、少弐という戦国大名の間で勢力が衰えまして、龍造寺・鍋島の家臣になっていきます。

次をお願いします。

これは中世の小城から近世の小城というふうに、千葉城を中心とした中世のエリアから近世、江戸時代の小城鍋島家を中心にしたまちの移り変わりというものを示した図でございます。以上です。

次をお願いいたします。

最後でございますけれども、鎌倉時代に、千葉氏は鎌倉や京都に屋敷を持っており、千葉氏は鎌倉や京都の文化を小城にもたらした。祭礼や信仰、仏教美術、そして中世の肥前の国の覇者は千葉氏であった。龍造寺・鍋島という、肥前には戦国大名がおりますけれども、その上位にあったのが千葉氏でした。そして、現在、小城には、中世文化が色濃く残されている。「小京都」、「小鎌倉」とも呼ばれているということで、報告を終わらせていただきたいと思います。どうも、ありがとうございました。

○遠山 どうも古庄さん、ありがとうございました。改めまして、本当に大変な被災状況の中でお越しいただきまして、ありがとうございます。

それでは、続きまして、鎌倉の馬淵さんから話しいただきたいと思います。何か、馬淵さん、きょう、新たにスライドを御用意してくださったそうですので、よろしく願い申し上げます。

○馬淵 時間がないので、大分はしょってお話いたしますけれども、千葉氏というよりも、それ以前になりますけれども、房総と鎌倉というのは、ダイレクトにつながっているところがありまして、先ほど、保立さんの御発表で、鎌倉から東京湾を渡って、香取の海まで行くという、そういうルートが赤い線で示されておりましたけれども、六浦、当時は「むつら」と言っていたと思いますが、六浦と房総との船便はいつ開かれたかという、これは1027年の忠常の乱、あのときに鎌倉が兵站基地となりまして、頼朝の先祖である河内源氏の頼信、頼義という武士が鎌倉に来まして、その前に、平直方がいるわけですが、ちょうど六浦の港から朝比奈の峠を越えて、真っすぐ西に向かったところに、現在、寿福寺というお寺がありまして、鎌倉五山の三位ですが、その間に鶴岡八幡宮があるものですから、その道がつながっているという認識が皆さんないかもしれませんけれども、大昔、平安時代はつながっておりまして、その突き当たりが、私の考えでは、平直方、あるいは、その娘婿であり

ます頼義などの館であったんだろうと思います。

平安時代末期になりますと、これははっきりと文献に頼朝のお父さんの義朝の館だという、鎌倉の館と言いますが、そのようにわかっております。そういうように、非常に古い時期からつながりがあったわけであります。これは、千葉氏の話とは直接には関係しませんが、

それから、先ほどの大日寺の写真の中で、外山さんの示された大日寺の五輪塔の写真で、一番手前の大きな五輪塔、あれは14世紀の初めのものでありまして、先ほど、保立さんも少し触れられましたけれども、明白に律宗というお寺の技術者たちがつくった形式、様式を示しておりまして、大日寺と律宗との関係というのは、以前から指摘されているところでもありますけれども、それが非常によくわかる資料であります。しかも、ここは千葉氏の菩提寺であるということは、鎌倉末期、14世紀の初めぐらいに、律宗と千葉氏のつながりがあれによって見えるかもしれないという、ちょっと気がついたところです。

私のレジュメに入りますけれども、1番の新しい生活形態の出現、平安時代後期から中世と呼びたいと思いますけれども、もう生活様式がガラッと変わる。それは、具体的にこれをごらんになって見ていただくとわかりますけれども、こんなふうに大きく変わるんですね。

各地に、集落、まちというものが出てくる。これはもう30年も前にいろいろな議論がされたテーマでありますけれども、出てくる。これは鎌倉においても同様でありまして、頼朝が来てから、いろいろな人が、「あそこへ行ったら商売になるぞ」みたいな形で鎌倉に集まってきて、早くも鎌倉前期の建保3年（1215）、前期の終わりごろになりますが、実朝の時代でありますけれども、商人の数を規制する最初の法令が出ております。

それから、3代執権北条泰時の時代になりまして、町場を大きく変えるんですね。それまでは、鶴岡八幡宮という鎌倉の中心の神社がありますけれども、その東側に幕府を置いていたのですが、それを若宮大路という鶴岡八幡宮の、御存じの方も多いと思いますが、参詣道の近くに幕府を移して、町並みを大きく変える。このときに初めて、「丈尺を打つ」という言い方を『吾妻鏡』の中でしておりますけれども、恐らく、これは京都風の碁盤目の町割りを意識したのだらうと思います。「丈尺を打つ」というのは、平城京とか平安京といった都城で行われている町割りのやり方です。

地図を出していただけますか。佐倉の歴博で使っていた写真があるんですけども。

先ほど言った六浦の港から下りてくる道というのは、こう来て、ここで鶴岡八幡宮に当たるんですけども、ここに寿福寺という元の源氏の館があるんですね。ここに、実は今も、「千葉地」という遺称があります。この辺です。現在の鎌倉市役所から御成小学校という小学校がありますけれども、その一帯にかけて、「千葉地」という字名が残っております。

この次の写真になりますかね、はい、これですね。ここの部分です。これは「千葉地」という字になっております。それを拡大した写真が次にありますけれども、画面を少し上げられますかね、はっきりと「千葉」という字が見えると思いますが、この一帯は、古代に鎌倉

郡の郡家（ぐうけ）、郡の役所があったところの一帯でありまして、鎌倉のまちの東西の山裾には、武家屋敷がずらっと並んでおりまして、千葉の屋敷は、その西側の山裾の勝地ですね。勝る土地といいますか、その土地で非常にいい場所、古代以来のそういう勝地にあるということがあります。

では、一体、その千葉は、鎌倉における千葉氏はどういうまちの中に住んでいたかといいますと、3番の五代執権時頼の時代ということになりますが、ちょうどこのころは、北条氏の得宗政権が大変日本中に力を及ぼして、強大な権力を振るうという時代になってくるわけでありまして、まちの中を、私の言葉で言うと「概念化」という、そういうことをやります。

つまり、幕府要人とか顯官といった政治にとって必要な人たちを鶴岡八幡宮の前面に置いて、あるいは御家人たちを東西の山裾に置いて、若宮大路の周辺に町場が形成される。

では、その町場というのは、どういう人かということ、町びとと言いますが、町人という言葉はまだないと思いますけれども、その町びとというのは、いわゆる商人、職人なのだろうと思います。

それから、ずっと南のほうに行きまして、地図を出していただけますか。これを大町大路と言うんですけれども、この通りですね、東西のこの通り。ここから南側が鎌倉のまちにとって、死者を葬ったり、あるいは動物を解体したりする技術者、職能者が、この前浜と言いますけれども住んでいる。そういうまちになるわけですね。

これは、私は近世の城下町の総構えの前身といいますか、萌芽がここに恐らく見えるんだろうと思っております、職人町、それから、まちの端っこのほうに、北や南やそういった端っこのほうにお寺を置く。真ん中辺に為政者とそれにかかわる人たちの居館を置くという、そういうまちの概念化といいますか、区分け、そういうことが鎌倉時代中期以降の鎌倉に見えるんだろうというように思っております。

この町並みの、この地図で言うと、千葉氏というのは、この辺に屋敷があったということになる。先ほどの地図を示すとそういうことになりますけれども、市川の博物館におられた湯浅治久さんが、千葉は鎌倉で、少なくとも建長6年の段階で、1250年代ですから、まさに鎌倉時代中期の北条時頼のころですが、そのころには、もう既に全国の年貢米に当たるような米を納める蔵とか、そういうものを屋敷の周辺に配置していたのではないかなというように言っています。

それを差配するのが、御存じの「法橋長專」だろうということでもありますけれども、そういうことも言われるわけですね。どうも町並みと千葉のかかわりというのが、どうも余りうまく説明できませんけれども、こういったまちの状況の中に、千葉邸はあったということがあります。以上です。

○遠山 はい、ありがとうございます。鎌倉の中で、特に千葉氏がどの辺にいたかということで、専らお話しいただきました。

それでは、この後のディスカッションにつきまして、まず最初に、時代設定ということで

確認させていただきたいと思いますが、やはり千葉、小城、鎌倉、それぞれの時代が微妙に違ってくるのかなと思いますけれども。千葉市に関しましては、外山さん、時代はどうでしょうか。鎌倉時代ということによろしいですか。

○外山 どんなに下がっても 1455 年、そこから下には絶対に行かないので、鎌倉時代を中心ということであります。

○遠山 はい、ありがとうございます。古庄さんのほうはいかがでしょう、時代のほうは。

○古庄 小城のほうですけれども、鎌倉時代の事例は余りないんですけれども、発掘調査、そういう古文書から見ると、15～16 世紀、その辺りが一番、繁栄といいますか、中心だったのかなというふうに考えています。

○遠山 はい、ありがとうございます。馬淵さんのほうはいかがでしょう。

○馬淵 鎌倉の場合は、平良文以来、つまり平安末期といいますか、後期といいますか、そのころ以来、もう千葉の名前は出てまいりますけれども、ただ、実際の存在感といいますか、それは鎌倉時代になって直後ですね。それから、やはり今言った鎌倉時代中期以降のまちの中における非常に重要な場所に位置しているという、そういうことから存在感を増してくると。

ただ、南北朝時代の終わりぐらい、あるいは室町になっても、千葉の名前は、もう 1 カ所、「千葉屋敷」というところがありますので、それは南北朝、室町だと思いますが、ずっと多分、影響はあったのだらうというように思っています。存在はあったんだらうと思います。

○遠山 はい、ありがとうございました。というわけで、各地域で微妙に時代設定が異なるところがあるかと思うのですが、それは一応、念頭に置いていただいて、これからディスカッションしていきたいと思います。

それでは、まず、きょうの保立さんの御講演にもございましたけれども、千葉の場合の城下町の二元性に当たるもの、先ほど外山さんのほうでおっしゃっていただきましたが、堀内と市場町ですね。そういったものが、ちょっとこれ、鎌倉は城ではないのでまた別の視点になろうかと思うのですが、小城の場合はいかがでしょうか。この二元性ということに関して、何かございましょうか。

○古庄 小城の場合は、先ほども申しましたように、千葉城、お城を中心として、その北側に、谷部に当たるんですけれども武家の集落があり、その南側の祇園川沿いの河原に、市場、町場が形成されていったというふうに考えています。

15～16 世紀になると、そういう交通の要所、川と道が交錯するような要所にそういう町場、武家の勢力の影響を受けながら、そういう町場が地方にも形成されていったのかなというふうに考えているところです。

○遠山 ありがとうございます。先ほどお話に出てきました小城の千葉城ですけれども、一応、始まりが南北朝ごろということでしょうか。それ以前に、山岳宗教と言いますか、聖地、聖なる地ですね、そういったような要素はなかったのでしょうか。

○古庄 そうですね、地元の須賀神社、祇園社の縁起には、平安時代の終わりごろに神社が

あったというような記録がございます。発掘調査によっても、そういう遡るような事例はないですが、ほかに、千葉城ではないんですが、岩蔵寺とか清水寺、そういう平安時代に遡るような寺院は、近くにあります。

○遠山 ありがとうございます。それでは、馬淵さんのほうで、鎌倉は城を中心にということでは全くないので、難しいかと思うのですが、鎌倉の町なかの人々の住み分けといいますか、階層による住み分けみたいなものは、何かございましょうか。

○馬淵 先ほど言いましたように、大きくは大町大路という鎌倉の海岸寄りの南のほうで、東西に走っている通りでありますけれども、そこから 100 メーターぐらいの幅のバッファゾーンがあるんですけれども、その南側はさらにさまざまな職の、あるいは芸能の人もいたと思いますけれども、それから、堅穴建物という浜に特有の鎌倉の前浜と言いますが、浜地と言いますけれども、特有の遺構群がありまして、非常に深いんですね、それは。深さが深いものだと 1 メーターを超えるものもありまして、住居じゃないと思いますので、恐らく、そこには倉庫群があったと、それは倉庫群であったというように思います。

だから、先ほども言いましたけれども、鶴岡八幡宮の周辺の幕府要人とか、そういった人たちが、それから、鎌倉の東西の山裾の通りに沿った御家人の住居、それから、若宮大路の西側の町場、それから、今ほど言いました浜地あるいは前浜という、そういうはっきりとした住み分けがあるのだらうと思います。

○遠山 ありがとうございます。その点に関しまして、外山さんのほうで、千葉の先ほど市場町のことをおっしゃっていただきましたが、何か付け加えるようなことはございましょうか。

○外山 繰り返しになりますけれども、都川の北側、つまり、私たちが今いるこの場所が堀内の一角だったと思うんですけれども、こちらには、千葉神社や大日寺、来迎寺、光明院、そういった千葉氏の館と千葉氏と結びつきの強いお寺や神社、そして、そこに住んでいたのは、やっぱり千葉氏と何らかのつながりを持つ人たちであったのですけれども、先ほど言いましたように、戦国時代に千葉氏が本佐倉に根拠を移してから、いわゆる町衆とか町人とか言われる人も堀内に住むようになって、今のまちの姿ができていると、そういうことになるんじゃないかと思います。

○遠山 先ほどの保立さんの御講演の中で、千葉の館の第 2 の候補として、千葉寺の北辺りだということで、おっしゃられていたんですけれども、これは非常に、私にとっては刺激的なお話でして、その中で、新田遺跡とか、千葉寺の存在とかございますけれども、その辺でちょっと補足説明をいただけますでしょうか。

○外山 千葉氏が千葉に入ってきて、やはり最初のころは、千葉寺、これは古代から続く寺院ですので、千葉寺に近いほうというのはかなり重視されていて、時代が下がって勢力を伸ばすにしたがって、今のこの千葉のまちのほうに拠点を移してきた。

でも、最初のころは、やはり千葉寺経塚という平安時代の終わりのお経を埋めた塚などもありまして、やはり千葉寺辺りにかなり力点があったというのは確かじゃないかなという

ように思っています。

○遠山 ありがとうございます。次に、古庄さんにお伺いしたいのですけれども、鎌倉のほうは、かなり、馬淵さんがおっしゃっていたように発掘事例が多くて、いろいろなことがわかっているようですが、先ほど出ました古町遺跡について、少しお話しいただけますでしょうか。

○古庄 古町遺跡なんですけれども、千葉城の南側、祇園川沿いに展開している遺跡でございますけれども、祇園川の河原上に形成されたまちです。

江戸時代の本には、祇園川沿いに小城のまちがあって、上河原、下河原というまちを立てて小城町と言ったというふうな記録がございます。実際、発掘調査によって、実際の中世のまちが発掘されたというふうに考えております。近世の江戸時代の記録を裏づけるような調査になったと。

そこでは、これも江戸時代の本ですけれども、祇園会、山挽祇園ですね、祇園会が行われていて、多くの人々が集まって、その山を見学していたとか、そういう記述も残っているようでございます。

○遠山 それから、古町遺跡では、何か鍛冶遺構のようなものが見つかったということを伺っているのですが。

○古庄 鍛冶遺構、鍛冶ですね。発掘調査によって、ふいごの羽口、スラグですね。鍛冶のときに出る金くそといいますか、そういうものが出土しておりまして、鍛冶屋がいたのではないかというふうに考えております。

これは、岩蔵寺の過去帳にある、古町にはそういう鍛冶がいたという記述を裏づけるような発掘調査の成果ではなかったかというふうに考えております。

○遠山 はい、ありがとうございます。岩蔵寺というお寺の過去帳に鍛冶の人の記事があった。そして、実際に古町遺跡から鍛冶遺構が出ているということですね。時代的には、少し下るんでしょうか。

○古庄 岩蔵寺の過去帳よりは、実際は発掘調査の成果は、ちょっと時代が下るんでございますけれども、そういう記述を裏づけるような調査になったのではないかというふうに考えています。

○遠山 はい、ありがとうございます。それでは、話は少し変わりますけれども、小城には、かなり鎌倉期の立派な仏像があり、それをしかも千葉氏、宗胤でしょうか、京都から仏師を連れてきたということなんですけれども、その辺で、もともと下総にいた千葉氏が九州へ行って、しかも、京都と結びつきがある。

そういう列島をまたぐネットワークといいますか、そういうものがあったということで、もう少し、その宗胤の仏像について、何か御説明いただけるとありがたいのですけれども。

○古庄 そうですね、千葉宗胤、千葉氏はその当時、千葉、鎌倉、京都にも屋敷を持っていたということで、京都にもいて京都大番役を務めたという記述もございますし、京都のかかわりも深かったということですのでけれども、蒙古襲来の際に、小城に下向して、大隅の守護

として、大隅守として仕事をするんですけれども、京都の文化、仏師をわざわざ佐賀まで連れてきて、仏様をつくらせたということで、仏教文化の流入についても、大きな役割を果たしたのではないかというふうに考えているところです。湛康という有名な運慶、慶派、その流れをくむ当時有名な仏師でございます。

○遠山 はい、ありがとうございました。仏像といいますと、千葉市に残る仏像で、いかがでしょうか、外山さんのほうで、何か鎌倉まで遡れる仏像はございますでしょうか。

○外山 そうですね、鎌倉まで遡れるかどうか、ちょっと微妙なところもあるんですが、南北朝ぐらいまでは恐らく間違いないだろうと。

例えば、亥鼻に東禅寺という禅宗のお寺、曹洞宗のお寺があるんですが、あそこの御本尊様は、ほぼ鎌倉期のもんと言っていいぐらいの非常に美しい、私の個人的な印象ですけれども、千葉市の仏像の中で最も美しい仏像と言えるんじゃないかと、そういった仏像は残っています。なお、その東禅寺は、今は失われていますが、鐘がありまして、その鐘の銘文に千葉のまち並みのことが記されています。「南は千葉寺で、北は八幡宮の間にまちがある」という、そういうような銘文が刻まれた鐘を持っていたお寺でもあります。

○遠山 はい、ありがとうございました。今の八幡宮ということで出てきたのですけれども、先ほど外山さんもおっしゃってました千葉の妙見の祭りは、実は祇園系だということでおっしゃっていただきましたが、小城のお祭りは、完全にあれは祇園ですよ。

馬淵さんのほうでは、いかがでしょうか。鎌倉でも祇園系の祭りというのは、ありますでしょうか。

○馬淵 鎌倉の祇園会は、先ほど大町大路という通りを説明しましたけれども、若宮大路という鎌倉の真ん中を走っている若宮大路参詣道の南のほうで、東側、大町大路は東西の道ですけれども、大町大路のそばに、現在、八雲神社というのがございまして、そこが以前は祇園山王社だったんですね。

室町後期の1490何年かの絵図に、そこの近辺の町場が描かれておりまして、そこの町場の人たちが祇園会をやっていたということはありますけれども、祇園会自体の記録が残っているのは戦国時代です。

それ以前に、では、室町以前に南北朝あるいは鎌倉まで遡って祇園の祭りをやっていたかという、そこは私、ちょっと不勉強で調べ切れていないんですけれども。

○遠山 ありがとうございました。鎌倉の場合は、確実にわかるのは、戦国期ということですね。ただ、3つの地域といいますか、千葉、小城、鎌倉、それぞれ祇園系の祭礼があったということは、やはり、町場ということが根底にあるということによろしいでしょうか。

そうしますと、その町場に関しましては、先ほどから出てきていますように、二元的なもので、市まちということが上がっておりますけれども、せっかく発掘事例が豊富であります鎌倉のほうで、もう少し、人々の暮らしがわかるというような、レジュメにもございましたけれども、その辺の陶磁器の話とかをもう少ししていただけますでしょうか。

○馬淵 私の写真のほうを出せますかね。・・・ここですね。これが先ほど言いました千葉

地という場所のすぐ南のほうの御成小学校というところで、30年ほど前、もう40年近く前ですが、調査したときに出土した武家屋敷でありまして、見事な武家屋敷だろうと思いますが、立派な武家屋敷の典型ですね。大きな掘っ立て柱の建物が並んでいて、その建物の間を縫うように、溝、鑑水だろうと思いますが、走っている。こういうところですよ。で、隣の家との境には、築地といいますか、土塁のようなものがある。

これは武士ですが、これが海岸一帯にある竪穴建物と呼んでいるものの一つです。いろいろな形態がありますが、ここでは、この形だけ写真に出しておきました。

これは、床面にびっしりと切石を敷いていて、その上に根太というものを置いて、屋根はどこで支えるかというと、実はこれ、壁で支えるんです。壁持ち建物と言いますが、これは日本の伝統的な建物の様式ではないのです。恐らく、これは中国だろうと思いますが、鎌倉の海岸は、和賀江島という貿易港がありましたので、その貿易港は中国から、私はダイレクトに南九州を通して太平洋航路で来ていると思いますが、この南九州の鹿児島県に万之瀬川という川がありますが、その河口に、これと同じ遺構が出るんです。これは、鎌倉の海岸部で無数に出るんですね。

日本の伝統的な建物というのは、中に柱を立てて、柱で支える。柱と梁で支える、そういう建物ですけど、これは壁で支える建物で、朝鮮半島で同じようなものが一基見つかっております。恐らく、もう間違いなく大陸由来なのだろうと思います。

これは、北条氏が先ほど言いました独占的な政治体制をする中で、中国との交易も、異論はあるかもしれないけれども、北条氏の専制貿易というふうに言われている中で、私の考えでは、博多を経由しないで中国の明州から琉球列島を伝わって南九州に来る。南九州から四国の南岸を伝わって、四国の南岸でこの建物が見つかることを期待しているんですが、まだ見つかっていないようですけれども。それで紀伊半島を経て鎌倉に来るという、これが一つの建物です。

次に行ってもらえますか。すみません、ちょっと長くなりますけれども。まちの住み分けに関して、これは何かというと人骨ですね。この人骨がどこにあるかというと、鎌倉の海岸部なんです。ここには、今の竪穴建物、この写真の中には見えませんが、すぐ近くに竪穴建物がいっぱい出てくる。場合によっては、竪穴建物が途切れたところに、この人骨がちょっとした空き地にある。

つまり、時代的には、共存しているんですね。そういう空間が前浜というところですね。非常に不思議な空間で、そんなことが一体どうやって可能なのかと考えますが、普通の人たちが、普通の人というか、一般の市民が働いて、いろんな職業の痕跡がありますから働いている。それから今言ったような、海上輸送の物資の集積施設である竪穴もある。そのすぐ脇に、こういう人骨があるということですね。

これは、先ほどの武家屋敷から出土した中国の竜泉窯というところの13世紀中葉から第三四半期を中心につくられた青磁ですね。これは調度品だと思います。

次に行ってください。漆器ですね。これは非常にきれいな出土した漆器です。私の考

えでは、鎌倉時代後期の漆器が多分、日本歴史上一番技術的にも美的にも進んでいただろうというふうに思いますけれども。

次に行ってください。銭が大量に出るんですけども、これは銭が集められたかめの中から出たものです。

日本は、御存じのように10世紀の終わりの乾元大宝以来、700年間銭をつくっておりませんので、江戸時代の寛永通宝までお金をつくっておりませんけれども、その間に、貨幣経済がものすごく進展するんですね。そこはまた不思議なところで、レジュメにちょっと書いておきましたけれども、東アジアの中国を中心とした経済圏に組み込まれていたということなのだろうと思います。以上です。

○遠山 ありがとうございます。やはり考古学の観点から見ると、いろいろなことがわかるなという感じがいたしましたけれども、その中で、今、馬淵さんがおっしゃっていましたことで、中国との交易を、博多を経由しないでしていた可能性がある。なかなか、これはびっくりしたところですけど、その辺について、もうちょっと何かご説明いただけますか。

○馬淵 博多の人は、反対すると思います。

○遠山 はい、ありがとうございます。交易といえば、小城はやはり、中国、朝鮮との交易の関係が深いと思うんですが、その辺いかがでしょうか。

○古庄 『海東諸国紀』という本をさっき御紹介しましたけれども、これは15世紀に書かれた本なんですけれども、李氏朝鮮の時代ですね、その中に「千葉殿」という記述があって、年に1回交易船を出すことを約束したというような記述が書かれております。

この記事については、最近、対馬宗氏、博多商人による偽使、偽りの使者の記述ではないかという研究がありますが、そうですね、否定的に捉えることもできますけれども、当時のある程度の様相を示していたのではないかというふうに考えております。

それと、博多を経由しないで、有明海という佐賀平野の前には豊饒の海がありますので、そこを経由しての中国あるいは朝鮮との交易もあったのではないかというふうに考えております。

神崎荘という荘園がございまして、そこは平家の重要な所領であったんですけども、その発掘調査によって、中国産の陶磁器類、そういうものが大量に出ておりまして、博多を経由しないで有明海の交易ルートがあったのではないかと、現在は考えられているところです。以上です。

○遠山 ありがとうございます。直接、中国との交易ということに関しますと、服部英雄先生が地名から、唐房でしたか、九州中に至るところにあるという御研究をされていますけれども、そういうことを考えますと、直接、宋とか何かの商人が来ているということは考えられますよね。

○古庄 服部先生の地名調査、しこ名調査ですけども、唐房という地名が九州各地に残されておりまして、平たく言えばチャイナタウン、中国人が居住していた集落ではないかというふうにおっしゃっているんですけども、佐賀の有明海側には、ちょっと唐房という地名

はないんですが、明時代の『籌海図編（ちゅうかいずへん）』という書物がございますが、そこには、蓮池とか寺井という肥前の国の当時の貿易港が記載されておりまして、それ以前にも、そういう港町があった可能性は考えられると思います。

○遠山 はい、ありがとうございます。やはり九州、小城は九州ということで、大陸・半島に近いので、今おっしゃっていただいたような交易がなされていたということが理解できました。

千葉は、ちょっと話が変わりますけれども、千葉で、国内の流通ということに関して、千葉の港がどういう働きをしていたかということについて、外山さんのほうで少しお話しただけですでしょうか。

○外山 これも、先ほどからちらちら出ているんですけれども、千葉のこの場所からいうと、右手の海辺あたり、この辺が「結城浜」とか「結城浦」とか言われていて、先ほどから出ている寒川なんていう港もありまして、六浦ですね。金沢称名寺のある、そこを結ぶ重要な水運があって、これは、きょう司会をされている遠山さんが一番詳しいんですけれども、そういったところを結ぶ水上ルートがあって、米とかそういうものが運ばれ、そして六浦、称名寺のほうからは、学僧、学問をするお坊さんが千葉に来て、そして大日寺とか千葉寺とかで、一生懸命、勉強をしたり、お経を写したり、そういったことを盛んにしていると、そういった結びつきがあるわけです。

では、その六浦とか鎌倉の先には何があるかということ、ずっと飛ばして言えば、当然、中国があるわけです。そして、どうも千葉氏というと、ずっと土着して千葉にいたんじゃないかというふうに思われるんですが、むしろ、1年の生活のうち、かなりの部分を鎌倉で過ごしていたんじゃないかと。この辺については、また、馬淵先生に伺いたいと思うのですけれども。ですから、千葉にあんまり実はいなかったんじゃないか。だから、千葉に余り千葉氏の痕跡がないというのも、かなりの部分を鎌倉で過ごしていたという、そういうことの反映だと思われる節もあります。千葉氏出身の僧侶たちに注目したいんですが、臨済宗の僧侶で中国に渡った僧侶とか、あるいは、これは野口実さんが明らかにしていますが、了行とか道源、道源は木内氏の一族ですけれども、そういった僧侶が中国に渡って、中国からお経を運んできたりしている。

または、亥鼻山から、さっきちょっと見ていただきましたが、中国産の陶磁器なども出ているということを考えると、鎌倉とか、あるいは京都とか博多とか、あるいは小城というクッションはあるのでしょうかけれども、そういうところを通じて、千葉も確実に東アジアの社会の中に組み込まれていたということは、間違いないと思うんですね。

ですから、千葉だけを見ているんじゃなくて、もっと広い視野で見えないかと、この時代は見えてこないんじゃないかなと、最近、つくづく思っている次第なんです。

○遠山 ありがとうございます。本日のディスカッションのまとめをもうしていただいたと思うんですけれども、やはり、この千葉シティだけではなくて、全国的な規模で千葉氏のことを見ていかなきゃいけないということで、おっしゃってくれました。千葉氏は、年中、

千葉にいたわけではない、ということの根拠になるものがあるかと思うんですが、その辺について少し補足していただけますでしょうか。

○外山 「六条八幡宮造営注文」というのがありまして、これは京都の六条八幡宮という源氏の氏神をつくるときに、諸国の御家人に幕府が割り当てて費用を出させるんですが、その中で、もちろん、千葉氏の一族もいっぱい費用を出しているのですが、そのときに、千葉常胤の直系の子孫たち、いわゆる千葉六党と言われている東とか大須賀とか国分とか、もちろん千葉の宗家もそうですが、そういった人たちというのは、何と「鎌倉中」という中に書かれているんですね。下総の御家人じゃなくて、「鎌倉中」です。下総の御家人には、臼井とかいろいろないわゆる両総平氏の一族がいるのですが、常胤の直系の子孫は、繰り返しになりますが、「鎌倉中」というふうに書かれているんですね。

ということは、むしろ、幕府は、千葉の一族は鎌倉にいる人たちと認識していたんじゃないかというふうに思われますけれども、その辺は、馬淵先生、いかがでしょうか。

○馬淵 千葉あるいは千葉の関係する一族がどれくらい1年のうちに鎌倉にいたかとか、それはすみません、私は全然よくわからないところでありましてけれども、そうですね、墓とか、そういうものであれば、その伝承、あるいは千葉氏系の人物の伝承を持った墓は、14世紀の初めぐらい、先ほど言った五輪塔の時代ですね、あれ、西大寺様式という律宗の五輪塔ですけども、宝篋印塔とかとともに、鎌倉にはよくありますね。ちょっと話の筋は違ってしまいますけれども。

ですから、そういう意味で、非常に結びつきといいますか、存在感は感じられますけれども、具体的に、じゃあ、千葉と鎌倉とどのぐらいの比率でいたかとか、それはちょっとわからないですね。すいません。

○遠山 はい、ありがとうございました。そろそろ、お時間のほうも迫ってきたところですけども、それぞれのパネラーの方に、これだけはちょっと言っておきたいとか、これを言い残したということがございましたら、お願いしたいと思うんですが、いかがでしょうか。どなたからでも結構ですけども。では、古庄さん、お願いします。

○古庄 小城からまいりましたので、小城の話をもう少し。

先ほど言いましたように、小城は、肥前の中枢部、中央にありまして、千葉氏の嫡流がこの小城に土着して戦国大名級まで栄えた。その本拠地として、小城には、いろいろな文化が開いて、現在に至っているということをちょっと御紹介したいと思います。

いろいろな仏教文化、お祭り、そういうものが色濃く残されておりまして、中世、小京都、小鎌倉、ひょっとしたら、現在、千葉市は大都市になっていますけれども、千葉市の原風景は小城に残っているのかなというふうにも、ちょっと考えた次第です。以上です。

○遠山 ありがとうございました。馬淵さん、お願いします。

○馬淵 先ほど、慶派の仏師の話が小城のほうの話で出ましたけれども、最近の運慶の研究というのは非常に進んでいるようでありまして、運慶は、途中からといいますか、かなり若い時期から頼朝の仏師として、鎌倉あるいは関東近辺で活動していたというのが、このころ

よく言われているところであります。

その慶派は、彼の流派でありますけれども、これが実は全国のいろいろなところで仏像をつくっているということは明らかでありまして、鎌倉におきまして、鎌倉時代後期ぐらいから、地藏信仰とかあるいは十王思想、これは地藏信仰と十王信仰は同じですけれども、そういった像に慶派が非常にかかわりを持っていることが明らかになっています。慶派がつくっているということが明らかになっております。

それで、これにかすかに関係するんですけれども、先ほど、肥前の神崎荘の話が出ましたが、神崎荘の脇に石塔院がありまして、五輪塔がいっぱいある、石塔があるんですね。その石塔が14世紀初め以来の、先ほどからしばしば名前を出しております律宗系の石塔なんです。西大寺様式という奈良の西大寺を大もととする律宗ですけれども、その様式を持っている。神崎荘の千葉と、それから先ほどの大日寺の五輪塔の存在、西大寺様式の五輪塔の存在を考えると、何か全国的にそういうかかわりといいますか、広い地域で、その千葉と律宗のかかわりというのは、余りこれまで言われていなかったと思いますけれども、かなり、私はちょっとたどれるような気が今してきたんですね。以上です。

○遠山 ありがとうございます。先ほど、馬淵さんの御指摘されました大日寺の五輪塔で、14世紀のものが律宗形式だということをおっしゃって、それに関しましては、金沢称名寺の文書の中に、やはり千葉の湊で、「大日堂の坊主の言伝」なんていう文言が出てまいりますので、やはり、かなり律宗との密接な関係があったのかなと、お話を伺いました。ありがとうございます。

最後に、いかがでしょうか、外山さん、先ほど、一応まとめを言っていただきましたが。

○外山 先ほどちょっと申しましたが、千葉氏出身の僧が中国に渡って活躍しているというお話をしましたが、その中で、了行と道源という人を挙げましたが、その道源は、徒然草の兼好法師の『徒然草』の中に何回か出てくるんですよ。そういった兼好法師とかなり近い人だったみたいです。

その道源は、何と中国に渡っているのですが、瀬戸内海にある淡路の国の由良庄という荘園の地頭なんですよ。ですから、千葉一族が淡路の国に所領を持ち、中国に渡り、そういうことをやっている、そういった人がいるということなんです。

ですから、繰り返しになりますけれども、やはり千葉氏のことを千葉だけを見ていたら、これから先、わからないんじゃないか。広い視野で見ていくということが大事だし、また、それが、今はちょっとコロナでグローバルという視点が陰りを見せていますけれども、でも、やはり孤立して鎖国して生きていけないわけですから、そういった広い視野で千葉を見ていくということは、これから大事なんじゃないかなというふうにつくづく思います。以上です。

○遠山 はい、どうもありがとうございました。

それでは、ちょうどお時間になりました。きょうのパネルディスカッションをお聞きいただいて、今までお持ちいただいた千葉氏に関するイメージとかが大きく変わってくれたら、

我々の役割を果たせたのかなとは思いますが。

司会不手際で、なかなか議論が深まらずに申し訳ありませんでした。

これから、千葉市は、2026 年に開府 900 年を迎えるわけですが、保立先生の御講演にもございましたように、これからやるべき課題はまだまだあるかと思います。ぜひ、皆様方の御協力をもって、開府 900 年祭を無事成功に持っていければと思います。

きょうは、どうもありがとうございました。

○司会 ありがとうございました。皆様、御講演及び活発な御討論をありがとうございました。中世のまちが見えてきたような気がいたします。

以上をもちまして、パネルディスカッションを終了いたします。会場の皆様、もう一度皆様に大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

それでは、ステージの皆様、どうぞ御降壇をお願いいたします。ありがとうございました。

○司会 この後、休憩を挟みまして、16 時 15 分から、千葉一族ゆかりの都市の首長様方による首長フォーラムが開催されます。

千葉市という共通の歴史や文化を持つ各都市における取り組みや今後の連携などについて話し合われますので、ぜひごらんください。会議の様子は、こちらのスクリーンで放映いたします。

引き続き、お席の御移動は御遠慮くださいますよう、お願いを申し上げます。

また、千葉氏クイズの応募箱が受付にございますので、御応募される方は必要事項を御記入の上、応募箱に御投函していただきますよう、お願いいたします。

それでは、市長フォーラムは 16 時 15 分からになります。どうぞ、よろしくお願いいたします。